



壬戌

官武通紀

十四

標示
卷十四
一市政事以改革始末
一東禪寺狼藉始末

リ 5
6419
13



德向供之... 亦如文... 亦省... 招... 之... 等...
第... 亦... 招... 之... 等...

中月之

即... 招... 之... 等...
第... 亦... 招... 之... 等...

中月之

之... 招... 之... 等...
第... 亦... 招... 之... 等...

中月之

招... 之... 等...



中月之

常... 招... 之... 等...
第... 亦... 招... 之... 等...

中月之

以... 招... 之... 等...
第... 亦... 招... 之... 等...

招... 之... 等...

中月之

字... 招... 之... 等...
第... 亦... 招... 之... 等...

中九

多刺多... 氣... 作... 中九

中十

多刺多... 氣... 作... 中十

中十一

多刺多... 氣... 作... 中十一

作... 中十一

中十二

多刺多... 氣... 作... 中十二

中十三

多刺多... 氣... 作... 中十三

中十四

多刺多... 氣... 作... 中十四

堺市より... 作舟... 代流...

廿五

淡路島... 作舟...

廿六

凡説

廿七

神奈川... 作舟...

廿八

舟... 作舟...

廿九

舟... 作舟...

三十

舟... 作舟...

不若名之 作如之 弱之 守

廿二十一

甲身 勃中 亩支 配一人 作如之 守
酒井 伯吉 守 殿 之 役 之 人 之 作 守 之
之 守 守 守

廿二十二

之大 名 之 亩 之 在 其 之 性 之 守 守 守
守 守 守 守 守 守 守 守

廿二十三

之 守 守 守 守 守 守 守 守 守 守 守

作 守 守 守 守 守 守 守 守

廿二十四

之 守 守 守 守 守 守 守 守 守 守 守
之 守 守 守 守 守 守 守 守 守 守 守

廿二十五

凡 流

廿二十六

之 守 守 守 守 守 守 守 守 守 守 守
之 守 守 守 守 守 守 守 守 守 守 守

廿二十七

小菅信孝人 配少... 其官體...

中二十八

上杉淳正大弼殿... 上... 其... 中... 也... 也...

附

系勅文... 振... 志... 氣...

中二十九

月鏡

中三十

日新

中三十一

其... 以上... 予... 孫... 治... 守... 切... 之... 也... 作... 如... 之... 弱... 也... 寫...

中三十二

月... 次... 之... 礼... 之... 減... 少... 之... 義... 之... 符... 之... 作... 如... 之... 弱... 也... 寫...

中三十二

志人... 割... 城

中三十一

... 割... 城

中三十

... 割... 城

中二十九

... 割... 城

中二十八

... 割... 城

中二十七

... 割... 城

中二十六

... 割... 城

中二十五

... 割... 城

中二十四

... 割... 城

以法如非是也... 亦持同...
... 作...
... 书

中四十一

... 改... 中...
... 作...
... 书

中四十一

初... 书

... 书

中四十二

... 二... 二... 二...
... 书

中四十二

... 作...
... 书

中四十二

... 作...
... 书

中月廿十

身始之礼... 作如之弱书

中月廿六

... 作如之弱书

中月廿七

... 作如之弱书

中月十八

... 作如之弱书

中月十九

... 作如之弱书

中月二十

... 作如之弱书

中月二十一

... 作如之弱书

作如之的書

中月二十二

病等之度釋亦之解之氣等之
作如之的書

中月二十五

以之氣方之氣等之个之也
下之捕而之氣等之尾流之網之樣亦
之解之亦之何之之書

之解之亦之何之之書

中月二十七

我日之志後之氣等之
作如之的書

中月二十九

以志中氣之法氣亦指之方氣之附
下之指之氣等之
作如之的書

中月三十一

以何人供在減少之氣等之
方指之个之抱之氣等之
作如之的書

廿五十七

海武不切のくす大止物事例稿
古の度心は事守は 作如く福言

廿五十八

此交の改草守事並建惑くはは板
身し事守は 作如く福言

廿五十九

夫名守の暇は下は守の好物也
作如く福言

廿六十

以從人守の事切の也 海く事は
騎馬亦有は物事守の 作
如く福言

廿六十一

以了能上く事守人く是く海新上は板
身し事守は 作如く福言

廿六十二

系所以上く事守乃く機始何く
身自安く事守乃く板始何く
身し事守は 作如く福言

中六十二

大なる目見玉湯山十七歳以下
子も久割合し海に取らるるに
是等事は御心も智し書

中六十三

子方様より如く書きたるは
是等事は御心も智し書

中六十四

上杉淳正方彌殿より中務大進殿
に書きたるは御心も智し書

右の供連より同殿より書きたるは御心も智し書
左の供連より同殿より書きたるは御心も智し書

松平忠直殿に供連書

中六十五

津佐紙中より殿に書きたるは御心も智し書
各地より書きたるは御心も智し書
新割合より書きたるは御心も智し書
是等事は御心も智し書

中六十六

多事制之改正之義守也 作也也也
中一写

附

以志中流之義守也

中一十八

以代智之義守也 巡見之義守也

義守也 作也也也

中一十九

此多事制之改正也 作也也也

多事制之改正也 作也也也

此多事制之改正也 作也也也

中一十七

此多事制之改正也 作也也也

此多事制之改正也 作也也也

此多事制之改正也 作也也也

此多事制之改正也 作也也也

作也也也

附

多事制之改正也

中七十一

來年姑之紀之其年春在由之勤
向大月年流亦之其勤之之其年
之作之其年書

[Faint bleed-through text from the reverse side]

東洋之極點

中一
揮索牛

東洋之極點
東洋之極點
東洋之極點
東洋之極點
東洋之極點

中二
同新之其年書於其後其後其後

之庵去寫

中九

松平丹波守殿之如牛何是守之書
子之及人其殺害之上自殺仕也
守之同人之如牛之同去寫

中八

系氏去寫抄

中七

松平丹波守殿東御守之發書之宛
守之同人之如牛之同去寫

中六

本回伯耆守殿東御守之發書之宛
守之同人之如牛之同去寫

中五

早死子負人大概洞字

中四

之檢収之書之洞字之同去寫

中三

探索抄

中二

今陰漢子如松柏子丹皮与殿名好年
姓名洞守

中十二

何夏字三潘死骸之同身氣之元因
在以前人上海至山多平 松平子博与殿
与松平与多他守守

中十二

何夏字三潘去蹟至山松平守守
松平守守守守守守守守守守守守守守
松平守守守守守守守守守守守守守守
松平守守守守守守守守守守守守守守

何守守

何夏字三潘自松平守守守守守守
松平守守

中十二

何夏字三潘死骸之川取守守守守
丹波守殿与松平守守守守守守

中十二

其人守守守守守守守守守守守守守守
殿守守守守守守守守守守守守守守

方英王國士の事記述の事書

中ノ十六

何れも其の事人々を殺害する事
多し其の後諸士々急慢其の事
佛子三三人は其の事書

中ノ十七

探索の事

中ノ十八

何れも其の事川合の事書

何れも其の事其の事書
其の事書

附

何れも其の事書

中ノ十九

何れも其の事其の事書
其の事書
其の事書

中ノ二十

昔のりふら結 其の振て 其の結を 海武所
其の有るに同身中 其の結を 振て 其の結を

但平中を 結れ 其の結を 振て 其の結を
振て 其の結を

七月廿二日

中

久改平向 實承 其の結を 振て 其の結を

付の 作れ 其の結を 振て 其の結を

其の結を 向 久改平 其の結を 振て 其の結を

其の結を 振て 其の結を 振て 其の結を

法 其の結を 振て 其の結を 振て 其の結を
其の結を 振て 其の結を 振て 其の結を
其の結を 振て 其の結を 振て 其の結を

七月廿二日

但如 其の結を 振て 其の結を 振て 其の結を

中

其の結を 振て 其の結を 振て 其の結を

其の結を 振て 其の結を 振て 其の結を

其の結を 振て 其の結を 振て 其の結を

其の結を 振て 其の結を 振て 其の結を

福吉守

今月三ノ日、如クモ家ノ和法向ノ事、物ノ後向
後三番、紙上ニシテ、并ニ物ノ所ノ事、物ノ且平
日紙上、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、
今月、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、
其ノ所、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、

五月廿二日

中七

今月中、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、
紙ノ使、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、

大同寺

者中、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、
亦、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、
其ノ所、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、
其ノ所、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、

五月廿二日

中八

字、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、
亦、所ノ和ノ事、物ノ所、一切、交納、所ノ事、

大同寺

凡幾承以昔之振合之志事人多減之亦成以物之素
良表之系其地程道之場亦多之且是年
京越町より伏見まで分道振合も多し
日向存多し中より多し京京町より
分道等より作身も多し又中より
系より中より人後より作身も多し
くも多し中より中より中より
系より上より中より中より中より
存以上

六月廿二日 中車名

酒井多使手箱

中十日

課多し中より中より中より

分道等より作身も多し

系より中より中より中より

今より中より中より

其の同文を物も多し場表も多し中程道の
場亦多し中より中より中より
中より中より中より中より
中より中より中より中より

今

同日

志中車

松原伯耆守

中十六

淡草本不精江分枝本是火之留分

作中分

淡草本不精江分枝本是火之留分
留分如也物亦平火消後是淡草
以中町大法人是也知合是也
所兼中分也少指下分町

淡草本不精江分枝本是火之留分

成七月二日

中十六

同説

淡草本不精江分枝本是火之留分
留分如也物亦平火消後是淡草
以中町大法人是也知合是也
所兼中分也少指下分町

淡草本不精江分枝本是火之留分

去前日投...
七月六日

中十九

和... 船... 作...

大... 船... 向...

條... 船... 向...

本... 船... 向...

本... 船... 向...

本... 船... 向...

中二十一

本... 船... 向...

本... 船... 向...

本... 船... 向...

本... 船... 向...

本... 船... 向...

七月

中二十一

甲... 船... 向...

此(海)面(下)之水觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(海)面(下)之水觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(海)面(下)之水觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(海)面(下)之水觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(海)面(下)之水觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(海)面(下)之水觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(海)面(下)之水觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(海)面(下)之水觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(海)面(下)之水觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(海)面(下)之水觸(少)於(近)岸(又)之(池)也

七月十日

但大自(身)之(同)能(自)覺(全)身(之)微(小)處(也)

中二十二

此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也

此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也

此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也

此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也

此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也
此(中)之(水)觸(少)於(近)岸(又)之(池)也

七月十三日

中二十日

お垣法政寺殿 筆録多し 之筆
多し 作す 之筆

筆録多し 筆録

お垣法政寺

今 交 筆 録 多 し 在 此 之 筆 録 多 し 筆 録 多 し

筆 録 多 し 筆 録

七月十七日

中二十日

お垣法政寺殿 筆録多し 之筆
多し 作す 之筆

筆 録

お垣法政寺殿 筆録多し 之筆
多し 作す 之筆

お垣法政寺殿 筆録多し 之筆
多し 作す 之筆

お垣法政寺殿 筆録多し 之筆
多し 作す 之筆

筆 録

七月十七日

中二十日

筆 録

お垣法政寺殿 筆録多し 之筆
多し 作す 之筆

此中記下之者凡六人... 亦非其人

八月廿日

中一二十七

小者... 支配... 宗體...

其... 支配... 宗體...

小者... 支配... 宗體...

人... 支配... 宗體...

宗體... 支配... 宗體...

壬二月十二日

中一二十八

上... 支配... 宗體...

其... 支配... 宗體...

宗體... 支配... 宗體...

壬二月十二日

宗體... 支配... 宗體...

其... 支配... 宗體...

宗體... 支配... 宗體...

今日... 宗體... 支配... 宗體...

宗體... 支配... 宗體...

分れ居山原の平 女中と云々 扱へ唱へ也
右系節の緩一條 一橋様と云々 平の川流
右中より云々 一橋様始末
裁す依り略す

中ノ二十

同敷

此交し之段平の作如く云々 安井忠平等
右中系節未六七人 会合云々 右中 右系節
弱し云々 右中 扱へ及列藩人 教へ減へ
扱へ云々 右系節 扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々

掃攘し之吹味と云々 扱へ云々 扱へ云々
何時迄も秋掃攘し時を待た様云々 扱へ云々
此辨ひ云々 扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々
就云々 扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々
小笠原國云々 扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々
扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々
扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々
扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々

中ノ二十

美名以上云々 扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々
扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々 扱へ云々

大同身正

美石以上之阿之務身次中ノ意切也
其年以心殿中ノ務務言務亦其用事
心殿内石連作依之志也一其丈減
切之也之連之益之人数ハ省ハ格下
同身

中ノ三十二

月次ノ務ノ減少ノ義身正信也
約書寫

大同身正

正月廿二日 二月廿八日

七月廿二日

九月廿二日

如之日限以中月次ノ務ノ為信也

御儀物

嘉祥

令格

如之規式以中ノ身正也

同身

如之務向ノ身正也

中ノ三十二

同

松平右衛門

冬中左衛門

松平河津守
松平妙海守

同中左衛門

海江右衛門

冬中左衛門

松平右衛門
松平左衛門
津野右衛門

冬中左衛門

松平修政守
冬中左衛門
津野右衛門

秋中左衛門

松平右衛門
松平左衛門
松平右衛門

冬中左衛門

松平内膳守
南新右衛門

同十子子子子

去申を序

松平三河守

宗室の事

松平忠尚

松平純和

松平の事

秋申を序

候事

丹羽左衛門

松平の事

上杉謙信

中務

南無

公判人を以て序し、其の二年同食と大約

目と限り、松平の事、宗室の事、松平

紀の事、大約一月を限り

一 去年 左府 向 去年 十二月中 余府
四月 餘日 餘 以下 年中 左府 向 三月
中 余府 七月 餘日 餘 以下 年中 左府
向 二月 中 余府 十月 餘日 餘 以下 年中
左府 以下 九月 中 余府 十二月 廿一日 餘
以下 餘 以下 年中 左府 向 二月 中 余府
以下 餘 以下 年中 左府 向 二月 中 余府
以下 餘 以下 年中 左府 向 二月 中 余府
以下 餘 以下 年中 左府 向 二月 中 余府

一 去年 左府 向 去年 十二月中 余府
四月 餘日 餘 以下 年中 左府 向 三月
中 余府 七月 餘日 餘 以下 年中 左府
向 二月 中 余府 十月 餘日 餘 以下 年中
左府 以下 九月 中 余府 十二月 廿一日 餘
以下 餘 以下 年中 左府 向 二月 中 余府
以下 餘 以下 年中 左府 向 二月 中 余府
以下 餘 以下 年中 左府 向 二月 中 余府
以下 餘 以下 年中 左府 向 二月 中 余府

祝子之身... 能上物... 是... 海...
去多... 取... 取... 取... 取...
取... 取... 取... 取... 取...
取... 取... 取... 取... 取...
取... 取... 取... 取... 取...

百首

中二十八

是... 是... 是... 是... 是...
是... 是... 是... 是... 是...
是... 是... 是... 是... 是...
是... 是... 是... 是... 是...
是... 是... 是... 是... 是...

大同自注

今... 今... 今... 今... 今...
今... 今... 今... 今... 今...
今... 今... 今... 今... 今...
今... 今... 今... 今... 今...
今... 今... 今... 今... 今...

百首

中二十九

今... 今... 今... 今... 今...
今... 今... 今... 今... 今...
今... 今... 今... 今... 今...
今... 今... 今... 今... 今...
今... 今... 今... 今... 今...

中ノ五十一

予謝 上覽之旨 心之 作之 之 弱 之 寫
以 年 之 射 坊 始 之 不 却 之 予 謝 上 覽 之 旨 心
之 弱 之 寫

如 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫

壬子年九月九日

中ノ五十一

今日之目 以下 等 之 譯 代 之 作 身 之 義 之 身
之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫

今日之目 以下 等 之 譯 代 之 作 身 之 義 之 身
之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫

作身之義 之 身 之 義 之 身 之 義 之 身 之 義
之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫
坊 日 之 作 身 之 義 之 身 之 義 之 身 之 義 之 身 之 義
後 身 之 內 之 身 之 義 之 身 之 義 之 身 之 義 之 身 之 義

但 之 身 之 義 之 身 之 義 之 身 之 義 之 身 之 義
作 身 之 義 之 身 之 義 之 身 之 義 之 身 之 義
之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫
如 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫 之 弱 之 寫

九月九日

中ノ五十二

病年子產釋亦之師振一
弱之寫

是之法役人病年引也
中少之向也
使者中毛也
教者格也
但之法也
如之法也

九月二日

中子十三

以三求方之系了
下子浦而之系年
之將子之系何也

之將札字

尾洪大納之版
水產中納之版
紀解中納之版

三才寸以年為一 城之... 作...
 録... 人...
 乃... 城... 夫... 下... 亦...
 控... 向... 城... 亦...
 是... 三... 中... 亦...
 被... 乃... 乃... 亦...
 下... 乃... 亦...
 彼... 乃... 亦...
 九月二日
 古...

式日...
 正月十四日...
 二月廿七日...
 十二月十三日...
 他...
 ...

多々能上之。其人多之。其能上之。
振之。其人多之。其能上之。

此至振之。其人多之。其能上之。
作之。其人多之。其能上之。
其能上之。其人多之。其能上之。
其能上之。其人多之。其能上之。

九月

廿六十二

其能上之。其人多之。其能上之。

同日午。其能上之。其人多之。其能上之。

同日午

其能上之。其人多之。其能上之。

其能上之。其人多之。其能上之。

其能上之。其人多之。其能上之。

其能上之。其人多之。其能上之。

其能上之。其人多之。其能上之。

其能上之。其人多之。其能上之。

十月

中平一

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

今大名今月見未濟 今十七年

先上世一五八八人数

侍者人 口附る者五人 押部人 多う五人

傘持者人 侍者五人 口付之 口付る者五人

惣侍者五人

美之守 美之守 侍者

侍 檢 侍者人 多う五人 押部人

日 檢 侍者人 傘持 押部人 惣侍者五人

系 押部人 多う五人

侍者五人 系 侍者五人 侍者五人

先上世一五八八人数

侍者人 口付部人 押部人 多う五人

傘持者人 侍者五人 口付部人 口付る者五人

惣侍者五人

中六十六

侍者五人 口付部人 押部人 多う五人

地 侍者五人 口付部人 口付る者五人

合 侍者五人 口付部人 口付る者五人

新 侍者五人 口付部人 口付る者五人

如 侍者五人 口付部人 口付る者五人

如 侍者五人 口付部人 口付る者五人

至る人教割大元半減之積り
おのれは振るゝ系より作らるる
43号

和らるる殿より同身より
此より多割より及正に作らるる
多路より多系役人教より用を
するに作らるるより作らるる
一穴甚るるより作らるる
よ女より作らるるより作らるる
交る人教割大元半減之積り

同身より作らるるより作らるる
作らるるより作らるるより作らるる
掛る同身より作らるる
女より作らるるより作らるる

十二月三日

但しおのれは振るゝ系より

廿七

此より多割より及正に作らるる
多路より多系役人教より用を
するに作らるるより作らるる
一穴甚るるより作らるる
よ女より作らるるより作らるる
交る人教割大元半減之積り

中減く云紙にて括弧するところを尋
ね作中の多弱を尋

降

ふふの字

角付

此等三緘の後ふふの字は 作中の多
上下の綴り（お）括弧括弧の綴り
千石以下又ふふの字は 中多の内弱面
減く云紙にて括弧する 作中の多
純字の綴り（お）字も 全納するも
お

召す純令納す減く括弧するは且又ふふ
以下も云紙にて括弧する 純令納
お

但令納令付するも 純令納する
お

十二月

ふふの字

一 言ふふの字は 紙にて括弧する
但おの字は 中多の字は 中多の字は
お

とある物事と云ふ事。 論議篇の附録
指し示す以上と云ふ事

但し定めておき物指しを明し
し、それよりおき物指しを明し
し、それよりおき物指しを明し

名目と云ふ事。 此れは
義と勤中小揚と云ふ事。 此れは
院隊と云ふ事。 此れは

院隊と云ふ事。 此れは
院隊と云ふ事。 此れは
院隊と云ふ事。 此れは

院隊と云ふ事。 此れは
院隊と云ふ事。 此れは
院隊と云ふ事。 此れは

院隊と云ふ事。 此れは
院隊と云ふ事。 此れは
院隊と云ふ事。 此れは

之流之切末一因之末後以之
一 車正月中旬之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之

十二月

中七十一

其年終生之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之

大月身 以月身

其年終生之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之
其年終生之末後以之

十二月

色平怪愛物言以下一全同之太被打
既而身重言治令之也中其驚之因在之
精培人教未言也中其持埔内系系之
中此中其神中上言上

成六月五日

戶田采女正

中一三

向新之氣之也言新氣也

之原之字

今使心時治美人一檢錄在得也中其意也
之怪愛物言以下一全同之太被打

兼之治令之也中其驚之因在之
之如也交持埔内系系中其也
中上言上

六月五日

中一三

松平丹波也殿也中其也

之入教言之上自教也

之持也之也

之使也之治美也利人宿也
之根也之亂入仕也人切實源也

く不るるとさるの一旦を捕を逐去止て矢
張之固め邦を不日と云ふ自致仕の振あり
あつたの中心に居てと云ふは海に舟を
まの中心に舟波を敷く事致日暇に
多んが多伯者自中殿下 仰付中
此をすくるとさるのと云ふは

六月 松平丹波守殿
仰付中殿下 仰付中殿下
仰付中殿下 仰付中殿下

言悔東程と美吉利人 猿宿致意
六月 松平丹波守殿
言悔東程と美吉利人 猿宿致意

本伯者自中殿下 仰付中殿下
仰付中殿下 仰付中殿下

言悔東程と美吉利人 猿宿致意
仰付中殿下 仰付中殿下
仰付中殿下 仰付中殿下

明二日登北山時。人散。若水松。子母。彼寺人
數。と代り。合。れ。終。こ。ま。の。乃。第。丈。人。散。多。の。為
其。終。の。終。向。厚。ん。身。の。終。下。中。身。の。志
和。玉。多。ん。一。と。其。終。の。

六月廿日

昂死之負人 大略調写

美人

女之肩。乞。き。下。左。之。撰。初。个。雨。降。自。其。死。中。

生之指子

女之胸。之。実。所。乞。个。不。昂。死。之。是。其。切。所。散
个。人。尔。

和玉字子母

一字毛 終 左 右

女之胸。之。實。所。乞。个。不。

女之胸。之。實。所。乞。个。不。

六月廿日

多檢使... 潤... 中... 身... 身...

英吉利人... 吊死

日... 深... 死...

女... 檢...

天... 女... 檢...

外國... 檢...

和... 檢...

女... 檢...

六月二日

探索...

昨日... 檢...

一俾... 檢...

我... 檢...

其... 檢...

右... 檢...

其... 檢...

右... 檢...

檢... 檢...

日 尾系才三信 年三十一

日 左城笑也忠 年二十九

日 小中氣 年二十九

日 尾系才三信 年三十一

日 小中氣 年二十九

日 尾系才三信 年三十一

日 小中氣 年二十九

日 尾系才三信 年三十一

日 小中氣 年二十九

日 尾系才三信 年三十一

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

新永年之助

年三十三

同中官

政吉

年三十九

同

義助

年三十九

同

清中織田

Handwritten text in cursive script, likely a list of names and titles.

Handwritten text in cursive script, likely a list of names and titles.

Handwritten text in cursive script, likely a list of names and titles.

因幡守中

六月三日

中十三

何處至其處死骸之目身之在國也
以爲人之所至也身之在國也
多如也之在國也

和力如牛何處至其處及自殺之身之在國也
中上王之身之在國也
自後自身之在國也
大木助九自何處至其處及自殺之身之在國也
死骸之目身之在國也
中上王之身之在國也

六月三日

松平丹波守

六月十三日

何處至其處死骸之目身之在國也
以爲人之所至也身之在國也
多如也之在國也
中上王之身之在國也

何處至其處死骸之目身之在國也

去二日見分其處死骸之目身之在國也
何處至其處死骸之目身之在國也
以爲人之所至也身之在國也
多如也之在國也

灯を打合今午時に羽織を脱ぎしに志を紙に紙
に合意せしむるに中しと其尋に玉と筆の合意
に其意の右合意を以て美人に近き者及殺傷
に及らざるに中し

其二本校言中山学侶才

東中島小門里人

名を以て

中一

此意を以て居た心は好意に在りて其意を以て
知らざるに中し

松平中門里人

名を以て

二十日押也

名を以て

此意を以て人を知るに其意を以て
人の及殺傷に及らざるに中し
其意を以て居た心は好意に在りて其意を以て
知らざるに中し
其意を以て居た心は好意に在りて其意を以て
知らざるに中し
其意を以て居た心は好意に在りて其意を以て
知らざるに中し

日一人十部

名を以て

此志為何處軍兵所不玉人及殺佈。其志極交此
之海軍報其報。其志極交此。其志極交此。
身以報。其志極交此。其志極交此。
殺。其志極交此。其志極交此。
其志極交此。其志極交此。

日人中心

又七

此志為何處軍兵所不玉人及殺佈。其志極交此。
其志極交此。其志極交此。

日人中心

漢中織記

此志為何處軍兵所不玉人及殺佈。其志極交此。
其志極交此。其志極交此。

中十九

何處軍兵所不玉人及殺佈。其志極交此。

其志極交此。其志極交此。

其志極交此。其志極交此。

イニシトシヨニニール

以て此の中に入らば殺す可いなり
軍に勝つたため殺害せしむる
人の幸なりと云ふも獨り
我々大志も振ふ哀願も
去七月廿三日迄話して
親務も志は人の扶助
うらみなきこと
計り交此の中に入らば
又久二成年

多中 和分寺
板人 岩周防

廿二十一

美知石の中紙の
行次中解
其終るに返

顔利大泥西エヤルセ
ニユルセ子ラール
イニシトシヨニニール

この日分話して
十二月四日

去程を許りりも。情并せ。れん。を
与心。改平。そ。あ。日。和。玉。を。り。し。つ。回。し。て
祝詞を述し。い。及。彼。の。愛。を。り。を。述。し。思。し
て。只。言。及。む。る。を。行。ひ。し。小。幸。に。危。難
を。り。も。あ。り。し。され。い。女。を。祝。せ。し。御。を。り
を。御。願。し。ん。情。を。あ。り。し。御。女。を。許。す。も
告。げ。程。後。後。も。を。り。ん。身。才。字。十。分。以。示。し
禍。害。を。未。萌。に。防。ぎ。を。ま。り。し。後。亦。を。先
が。去。り。の。り。を。れ。を。ま。り。の。前。所。り。し
る。を。少。し。い。は。も。并。く。ま。り。し。て。押。隠。道。理

を。し。去。り。論。を。り。又。を。許。字。に。御。教。せ。し
あ。り。一。第。一。も。能。く。と。祝。詞。を。述。る。小。あ。り。し。り
取。り。を。是。を。并。解。す。り。程。を。り。も。あ。り。し
た。り。御。し。結。を。り。許。に。あ。り。し。て。も。祝。詞。を。述
る。と。し。も。何。そ。自。ら。あ。ん。喜。む。と。記。し。ん
や。祝。詞。を。以。念。志。め。ん。と。計。ら。む。小。回。ん。を。も。欺
く。御。の。り。し。た。り。も。を。り。を。御。玉。上。使。ん。御。を
御。も。あ。り。ま。し。き。を。許。し。ん。身。才。の。情。を。り。も。御
瞭。ち。り。御。し。れ。い。是。又。も。系。御。府。上。切。の。り。も
り。情。を。解。せ。た。り。し。り。も。り。ん。御

し人を殺すをい死にまし償ふのよしを
ましてされるまも也されとも殺備小
多しひし春日給のち扶助のちふるる
情理の和ししちるまを所法に及も又
可ちるるししこまを(ま)たる港におの
てお玉人より殺備をまひしを河れた
償ふのま中入るるるるましされた
お政府の法をまをお玉人にお節しるる
勿論互にお玉のちたりともを謂人を
害するをまのまのまの死をい死小

まし母のまをまのまを律小使小まも
のされともお玉人自殺して果たれを許
お法の結をまをまをまを沈せんとも
を死骸をまをお玉津におおのちをい名し
かたきまのまのまのまのまのまのまのま
まをを卒まも人お換るる扶助のちお旨
を浪化のまをまを許の報をまを海人
のまのおおのまをまをまをまをまを
まを程まのまをまをまをまをまを
まを許るるまをまをまをまをまを

忠孝原圖

Handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side of the page. The characters are small and difficult to decipher.

左武通紀卷十

行勇丹五帝寫

